

主 題：預言者サムエルの母

聖書箇所：サムエル記 第一 1章1節－2章10節

ひとりのアメリカの詩人がこんなことを言っています。ひとりのよき母親は百人の教師に匹敵すると。確かに母親の影響というのは大きいものです。子どもたちの信仰にも大きな影響力があります。パウロはテモテの信仰に関して、最初祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったものが今あなたのうちに宿していると言いました。間違いなく彼らはそのすばらしいイエス・キリストにある救いをテモテに伝えたのでしょう。みことばは確かに私たちに母親の信仰者としての務めについて教えてくれます。神から託された子どもたちに主を伝えるという大きな責任を与えられているのはもちろん母親だけではないことは皆さんご存じです。しかし、特にこうしてみことばは母親にこの務めを与えています。

A. 背景 1: 1-6

1) エルカナの家族 1-3節

きょう見ていくのは、まさにそのことを実践したひとりの母親についてです。彼女は自分の子に霊的に、また信仰的にすばらしい影響を及ぼしました。この人物から学ぶことはたくさんあります。その人物、その母親の名前はハンナと言います。その息子の名前はサムエルです。

サムエルという人物はモーセ同様にイスラエルの偉大なリーダーです。彼は最後のさばきつかさ、祭司、また預言者であったと言われます。サムエルはイスラエルの初代の王サウルと2代目の王ダビデに油を注いだ者です。みことばは「少年サムエルはますます成長し、主にも、人にも愛された。」(1サムエル2:26)と言います。神に愛され、大いに用いられたサムエル。その母ハンナと父エルカナをこのみことばの中から私たちは学んでいきたいと思えます。すばらしい両親たちです。

きょうのテキストはサムエル記第一の1章です。1節を見ると、「エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムに、その名をエルカナというひとりの人がいた。この人はエロハムの子、順次さかのぼって、エリフの子、トフの子、エフライム人ツフの子であった。」とあります。「ラマタイム・ツォフィム」、一般的には「ラマ」と呼ばれていますが、まず両親がどこに住んでいたのかが記されています。大体エルサレムから北に8キロぐらい行ったところですが、実はここにサムエル自身も葬られるのですが、そこに両親がいました。サムエルの父、エルカナという人物は1節には「エフライム人ツフの子」と書かれていますが、エルカナはイスラエルの十二部族の中のレビ部族に属する人物でイスラエル人です。でもそのように呼ばれていたのは彼らが「エフライム」という地域に住んでいたからです。

2節に「エルカナには、ふたりの妻があった。ひとりの妻の名はハンナ、もうひとりの妻の名はペニンナと言った。ペニンナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった。」と記されています。悲しいことですが、そしてもっと言えばみことばに反することですが、実はこの当時、父親の名前を残すために妻に男の子が生まれなければ別の女性を妻として迎え入れることができたのです。実際にアブラハムやヤコブもそうでした。旧約聖書の中にはそれ以外の人物が出てくることは皆さんご存じだと思います。恐らくエルカナの妻はハンナであり、ハンナに子どもがいなかったゆえに、このペニンナが与えられて、ペニンナが子どもを生んだということを見て取ることができます。実はこのことが大変な問題を家族にもたらすのです。

このエルカナの信仰が3節に出ています。「この人は自分の町から毎年シロに上って、万軍の主を礼拝し、いけにえをささげていた。そこにはエリのふたりの息子、主の祭司ホフニとピネハスがいた。」、この箇所が私たちに教えてくれるのは、このエルカナという人物が主を愛して、主を信じていたことです。ですから主を礼拝するために毎年彼は家族とともに「シロ」に上っていったことが書かれています。そのようにして彼らは主の教えに従ったのです。実はイスラエルがカナンを征服した後、「シロ」に会見の天幕が作られ、「シロ」が宗教や政治の拠点となっていたのです。ヨシュア記18章、19章、22章の中に出ます。ですから彼らは「シロ」に上っていったのです。彼らがどこに住んでいて、どういう家族構成で、彼らの信仰的な部分を1-3節で見ることができます。

2) エルカナの家族の問題 4-6節

しかし、4-6節にこのすばらしい家族に問題が生じたことが記されています。「その日になると、エルカナはいけにえをささげ、妻のペニンナ、彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えた。また、ハンナに、ひとりの人の受ける分を与えていた。彼はハンナを愛していたが、主が彼女の胎を閉じておられたからである。彼女を憎むペニンナは、主がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにした。」と書いてあります。「シロ」の宮に彼らが上っていった時に、家族が集まって食事をしているような風景が記されています。実はいけにえの中にはいろいろな種

類がありました。例えば罪のためのいけにえ、罪過のためのいけにえ、そして全焼のいけにえというのがありました。これはいけにえを捧げた人がその肉を食べることはできませんでしたが、ただ一つはいけにえは可能だったのです。それは神と和解した者が神への感謝を捧げる和解のいけにえです。いけにえを持っていくと、まずその脂肪は焼かれます。そして胸と腿は祭司に与えられるのですが、それ以外の部位は捧げ物を捧げた人に戻されるのです。その後、家族はそこでそれを食したのです。その時の様子がこの4節のところから書かれています。ペニンナには子どもが複数人いて、それぞれに与えられるのでハンナよりも多くの肉が与えられています。恐らくペニンナはそのことを自慢したのでしょう。それをハンナは大変悲しく思うのです。5節は、新改訳聖書の第二版には「ハンナに、ひとりの人の受ける分」と書いてありますし、第三版は「特別の受け分」とこの箇所を訳しています。これはハンナは普通の人のご二倍の量をもたらしたということです。ですから彼女はペニンナ個人の倍の肉をもたらしたのです。しかもエルカナは8節で「ハンナ。なぜ、泣くのか。どうして、食べないのか。どうして、ふさいでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」と慰めのことばをかけています。エルカナはハンナのことを愛していました。しかしペニンナの意地悪な行為によってハンナの心は痛み、子どもが与えられていないことを大変深く悲しんでいたのです。

B. 信仰者ハンナの三つの特徴 1：9-28

さて、今私たちはこの話の背景を見てきました。自分の力で子どもをもうけることはできません。この自分ではどうすることもできない状況にハンナがどんなふうに対応したかです。彼女の対応が彼女がどのような信仰者であったのかを明らかにしてくれます。我々はこの後、彼女の祈りの中に記された彼女の三つのすばらしい特徴を見ていきます。

1サムエル1：9-12

:9 シロでの食事が終わって、ハンナは立ち上がった。そのとき、祭司エリは、主の宮の柱のそばの席にすわっていた。

:10 ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。

:11 そして誓願を立てて言った。「万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」

:12 ハンナが主の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。

1. 神を畏れる女性

この中で、私たちがこのハンナについて学ぶことの一つ目は、彼女は間違いなく神を畏れる女性であったということです。

1) 罪を憎む人物

なぜそれがわかるかというと、ハンナのことを憎み彼女を苦しめたいと願っていたペニンナは、6節にあるような悪をハンナに対して働くのですが、ハンナは彼女の悪に対して悪で報いようとしていない。そのことは間違いなくハンナは罪を憎む人物だったということです。

2) 主に対して謙遜な人物

また同時に、11節の祈りを見ると、彼女は非常に主に対して謙遜な人物です。彼女は主をよく知っていました。最初に「万軍の主よ」ということばで神のことを呼んでいます。「万軍の主」というのは天の軍勢の神、つまり力のある神という意味です。ハンナはこの神に力のある方、まさにどんなことでもおできになるお方という確信を持っています。ですから彼女は神がどんなお方であるかをただ知識として持っていたのではない、この神のことを心から信じ受け入れていたゆえに、彼女はその神の目から自分のことを見ています。11節の中に3回「はしため」ということばが繰り返されています。彼女は「はしため」、下女や召使いということばで自分のことを呼び、自分のことを非常に謙虚に見ています。まさに謙遜の印です。彼女は神を見上げたのです。私の神はどんなことでもおできになる、その力を持っておられる方であり、その神の前に私はただのしもべに過ぎないと。私の責任はその方に服従することだけです。そのような関係を彼女はここで告白するのです。明らかに神を知り、そしてそれによって彼女は自分のことを正しく知っていました。謙遜な人物であったがゆえに神は彼女を用いるのです。

我々信仰者がしっかりと覚えておかなければいけないことは、神様はどの時代でも同じです。高慢な者たちをお使いにならないのです。なぜかというと、自分の腕がこれをなしたとか、自分の知恵でこれを達成したとみずからを誇るからです。自分の弱さと愚かさを知っている人は神の助けがなければ、神が喜ばれることが何一つできないことを知っています。ですから神に助けを求めようとするのです。そしてその人は間違いなくすべてのことを神に感謝します。あのモーセもそうでした。「モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」と民数記12：3で教えます。そういう人を神様はお使いになる。まさにこのハンナもそうであったことがわかります。

2. 神を信頼する女性

二つ目は彼女は神に信頼を置いている女性でした。この祈りの中で彼女は神様に何も命じていないし、取引もしていない。彼女は自分の心をそのとおりに、正直に神の前に告白するのです。そして彼女が求めているのは自分の願い事がかなうことよりも神のみこころがなされることです。またこの祈りを見た時に、彼女は自分の神には子どもを与える力があることを確信していたことがわかります。「このはしのために男の子を授けてくださいますなら」とそれが可能であることを彼女は知っているのです。問題は与えられるかどうかではなくて、与えられることがみこころかどうかです。彼女はみこころならば必ず与えられることを知っているのです。ということはみこころでなければ与えられないことも知っているのです。このように彼女は神の前に自分の心にあるものを素直に告白するのです。

そして見ていただきたいのは17-18節です。それまでをお読みします。

1サムエル1：12-18

- :12 ハンナが主の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。
:13 ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。
:14 エリは彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさませなさい。」
:15 ハンナは答えて言った。「いいえ、祭司さま。私は心に悩みのある女でございます。ぶどう酒も、お酒も飲んでおりません。私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです。
:16 このはしのために、よこしまな女と思わないでください。私はつのる憂いといらだちのため、今まで祈っていたのです。」
:17 エリは答えて言った。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるようになります。」
:18 彼女は、「はしのために、あなたのご好意にあずかることができますように。」と言った。それからこの女は帰って食事をした。彼女の顔は、もはや以前ようではなかった。

彼女が祈りに行った時、みんなで食事をしていたのです。でも彼女は余りに悲しくてその食事を口にすることができませんでした。全く希望が見えなかった。しかし、彼女は自分の心を注ぎ出して神の前に祈り、エリと話した後、そこに戻って再び食事を始めるのです。しかも18節に「彼女の顔は、もはや以前ようではなかった」とあります。彼女が祈りを始めた時に、彼女の心がどんな状態であったのか、彼女自身が16節で「私はつのる憂いといらだちのため、今まで祈っていた」と言っています。この「憂いといらだち」というのは不満や不平、苦しみ、悩みです。確かに彼女が祈りを始めた時、彼女の心の中にはそういった不満や苦しみや悩みがありました。しかし、祈った後、彼女の心は変えられたのです。

「彼女の顔は、もはや以前ようではなかった」、人間の表情というのはおもしろいものです。心の中にあるものが表情に出てきます。恐らくハンナが祈りについた時の表情には喜びを見ることはできなかった。ところがこの祈りが終わった後彼女が食事に戻った時、表情は希望にあふれ、喜びにあふれていた。それは心が変わったからです。彼女は神のみこころがなされることを確信したのです。

だからといって、意地悪なペニンナはまだそこにいて、子どもたちは食事をしてはしゃいでいる。彼女を苦しめた状況は何一つ変わっていない。でも彼女の心が変わったのです。彼女は主に委ねることを学び、主の最善がなされることを信じるのです。それが心に喜びを維持する方法なのです。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」、1ペテロ5：7でペテロがそう言っています。パウロもピリピ4：6-7で「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」と言っています。新約聖書の教えも旧約聖書の教えも変わらないのです。ハンナは主なる神に自分の重荷を下ろしたのです。この方に信頼を置いたのです。主の御手にすべてお委ねしたのです。そしてみこころがなされることを確信したのです。その時に神が彼女の重荷を除いてくださった。

私たちもそのレッスンを学ぶことが必要です。あなたが重荷を負い続けることはできます。でも悲しいことにそこには神の祝福は何もありません。あなた自身も苦しい。主を知らなければその生き方しか選択肢はありません。でも主を知った私たちには別の選択肢があるのです。主ご自身が言われているように「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい」、我々は自分の重荷をこの方の前に持つていくことができるのです。この方がそれを負ってください。マタイ11：28に「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」とあります。それを経験しながら生きている信仰者は幸いな者です。そのような祝福があなたには与えられている、約束が与えられているにもかかわらず、まだ自分で重荷を背負いながら、生きることを嘆きながら歩んでいる人がいたとしたら悲しい話です。でも残念ながらそういうクリスチャンがいることも事実です。

そして19-20節「翌朝早く、彼らは主の前で礼拝をし、ラマにある自分たちの家へ帰って行った。エル

カナは自分の妻ハンナを知った。主は彼女を心に留められた。日が改まって、ハンナはみごもり、男の子を産んだ。そして『私がこの子を主に願ったから。』と言って、その名をサムエルと呼んだ。」とあります。みことばは祈りが聞かれて彼女に男の子が与えられたことを教えてくれます。

◎ハンナに子どもが与えられなかった理由

さて、皆さんに考えていただきたいのは、なぜこの時までハンナに子どもが与えられなかったのかです。その理由は、一つは彼女の信仰が成長するためです。もう一つは神の偉大さが示されるためです。このことを通して確実に彼女の信仰は成長し、彼女自身の性格さえも変えられたことは言うまでもありません。なぜならこの後、彼女は告白しただけではなく、実際に彼女にとって最も価値あるもの、最も尊いものをみずから進んで神に捧げます。サムエルです。彼女はこのレッスンをしっかり学んだのです。そこで皆さんに注意しておかなければいけないことは、こんな人になったら神は願いを聞いてくれるのではないか、欲しいものが手に入るのではないか、もしそういうふうを考えておられたらそれは大きな間違いです。私たちの神は常に最善をなされる方で最善しかなされない。私たちがそのことを学ぶ、しっかりとそれを理解する、そしてこの神に対する確固たる信頼を置くために、我々はさまざまな形を通して信仰のレッスンを受けているのです。なぜなら神に信頼していると言うことは簡単です。でも実際に信頼を置いているかどうか、いろいろな機会にそれが試されます。そうやって信仰が訓練されていきます。ハンナは自分の身内にこういう意地悪をする人がいて、とても悲しく辛かったのです。ですからみんなですべての感謝の食事も彼女にはできなかつた。それほど心は苦しかったのです。でも彼女は悪をもってペニンナに対応したのではない。すべて神のもとに持っていくのです。神の前に自分の心を注ぎ出して、神の最善を信じるのです。その時に神は彼女の心に働いて彼女は元気を取り戻すのです。喜びを回復します。彼女はどんな時でも主に信頼を置くというレッスンを学んだのです。

◎サライとハンナの違い

同じような状況でこのレッスンを学ばなかった私たちの愛するひとりの姉妹がいます。その人の名前はサライです。後にサラと呼ばれる人物です。アブラハムの妻です。彼女は同じような状況に直面するのですが、悲しいことに彼女は自分の欲しいものを自分の力で得ようとして失敗するのです。ひょっとしたらあなたも同じことをしているかもしれない。ハンナの最後の特徴を見る前に、アブラハムの妻サライとハンナを比べて見てみましょう。そのことによってハンナの信仰をより深く理解することができると思います。

創世記 16 : 1-4 に「アブラムの妻サライは、彼に子どもを産まなかつた。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルといった。サライはアブラムに言った。『ご存じのように、主は私が子どもを産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにおはいきください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。』アブラムはサライの言うことを聞き入れた。アブラムの妻サライは、アブラムがカナンの土地に住んでから十年後に、彼女の女奴隷のエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた。彼はハガルのところにはいった。そして彼女はみごもつた。彼女は自分がみごもつたのを知って、自分の女主人を見下げるようになった。」とあります。よく似ています。サライに子どもがなく、自分の女奴隷を自分の夫に与えます。確かにこの当時、自分に子どもがなければ自分の奴隷を夫に与え、生まれた子どもはその主人、この場合だとサライの子どもになるという習慣がありました。ですからサライが2節で言っているのはそのとおりなのです。自分は産めないから女奴隷を通して生まれた子どもは私の子どもとして見られるという習慣でした。

こういう状況にあって、サライがどんな対応をしたかです。2-3節を見ると、サライは自分に子どもがないことを悲観していました。サライはそういう状況の中で、神のみこころを求めるよりも自分の計画に従って歩もうとしました。子どもを得る方法を自分で考えるのです。そこでどういう選択が神の前に正しいのか、どういう選択が神の栄光を現すのか、そのことを考えていません。彼女の関心はただ一つ子どもを得ることだけでした。しかも彼女の問題は、みことばの知恵、神の知恵によって問題を解決しようとするのではなくて、人間の知恵でそれをなそうとしたところです。

創世記 15 : 3-4 にアブラハムと神とのやり取りがあります。「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらないので、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう。と申し上げた。すると、主のことばが彼に臨み、こう仰せられた。『その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。』」。この後、天を見上げなさいと、星を数えることができるならあなたの子孫はそのように増えるのだという話をするのです。つまり子どもがいないアブラムと神との約束は、あなたとサラの間で子どもが生まれ、それがまさに星の数ほどになるというものでした。その約束をいただいて16章になっているのです。アブラハムがそのことを知っていただけではない。サラも知っていたはずで、彼は間違いなくそのことを話したでしょう。しかし、彼女が選択したのはその神の約束を信じて、神の時を信頼して待つのではなくて、自分の力でこの問題の解決を図ることでした。

た。悲しいことに神の約束を信じていません。そしてこのことが大きな問題をもたらすのです。16 : 4で見たように、ハガルが私には子どもがいる、あなたにはいない……と自分の女主人の事を見下すようになるのです。ですから自分がした選択が正しくなかったと、本来ならばサラは気づくはずですが。ところが彼女は自分の失敗を人のせいにするのです。2節を見ると「主は私が子どもを産めないようにしておられます。」と。自分が子どもを産んでいないのを神の責任にするわけです。そして、5節には「私に対するこの横柄さは、あなたのせいです。」と、こんなことが起こっているのは、アブラム、あなたが悪いのだと彼女は自分の夫を責めています。自分が蒔いた種なのです。彼女はそれを通して反省したり悔い改めたりしなかった。彼女はその問題が起こったのは夫のせいだと夫を非難します。同時にサラは、見下げるようになったハガルの悪に対してこうこたえます。アブラムを責めたサラにアブラムは「ご覧。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。彼女をあなたの好きなようにしなさい。」と言い、「それで、サライが彼女をいじめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。」とあります。彼女は悪をもって悪に応じるのです。彼女は何が神の前に正しいかを考えず、彼女をいじめるのです。そしてハガルはそこから去っていったと。

このすべての出来事は本当にサライの大きな罪です。でももっと悲しいのは、なぜアブラムがそのことを許可したのかです。どうして彼がその問題を正してあげなかったのかです。実際にこの二人の問題の布石はもう既に置かれているのです。というのは先ほども見たようにサライがハガルを与えると行って彼女を連れて来た時に、それは神のみこころではないと諭すことができたはずなのに、アブラムはそれをしていません。彼はサライがその家庭を導くのを許したのです。その結果、家庭の中に問題が生じたのです。なぜか——。主が喜んでおられないからです。みことばが教えているのは、偉いとか偉くないの話ではなく、それぞれの役割があって、家庭は男性が導くのです。しっかりとそれぞれの霊的な必要を満たしていこうとするのです。悲しいことにこの信仰のジャイアントであったアブラムもこのような失敗を犯すのです。

さて、今私たちはこの愛するサライの事を見てきました。彼女は自分で問題を解決しようとしたし、自分の失敗を人のせいにしてしているし、そして悪に対して悪で報いていました。でもハンナは違いました。彼女はペニンナの悪に対して罪を犯すことなく、神の前に正しいことを思っただけで対応しています。また自分が悲しんでいた子どもがいらないというどうすることもできない現状に対して、それをだれかのせいにしていません。そして彼女は人ではなくて神の知恵でもってこの問題を解決しようとした。なぜなら彼女はすべてのことを神の前に持って行ったのです。

3. 神を愛する女性

1) ハンナの誓い

きょうのテキストに戻ると、ハンナという女性は神を畏れる女性であり、そして神を信頼する女性でした。三つ目に言えることは彼女は神を愛する女性でした。もしハンナが利己的な人物だったら、そして自分の辛い立場を改善していただくことだけを願っているとしたら、恐らく彼女はその与えられた子を捧げるという約束はしなかったはずですが。なぜなら捧げてしまったらまた同じ状況に戻るのです。また今までと同じようにペニンナから苦しみを受けるのです。ですからその苦しい状況からただ逃げたいだけなら、子どもを与えてください、そうすればこのような悲しみを経験することがなくなりますからと祈ったはずですが。でも彼女は違ったのです。もし与えてくださって、それがみこころならば私はその子を一生主に捧げますと。彼女は自分のことは考えていない、自分のその空しさが、自分のその悲しみだけが満たされたいという利己的な思いは持っていませんでした。彼女の考えの中には神を喜ばせることしか考えていない。

そこで11節に「そして誓願を立てて言った。」とあります。ハンナはナジル人としての誓願を立てるのです。このナジル人というのは民族や国籍ではないのです。ある期間自分をきよめて主への奉仕にみずからを捧げた人をナジル人と言うのです。このナジル人に関する規定は民数記6章の中に出てきます。ハンナは息子のために誓願を立てるのです。もし息子を与えてくださったなら、あなたにお返しします。そして主に用いていただくためにその子を捧げます、これが彼女の誓いだったのです。彼女は感謝として、その息子を主にお捧げすることを誓ったのです。やっと与えられた、お腹を痛めて産んだ愛する子どもです。その子を自分のもとに置いておきたいと思うはずですが。でも与えられた感謝として彼女が約束したことは、神様、この子をあなたにお返しします。つまり彼女は愛しいその息子よりも神を愛したのです。そんな女性でした。

2) エルカナの信仰

21節からを見ると、夫エルカナの信仰を見ることが出来ます。「夫のエルカナは、家族そろって、年ごとのいけにえを主にささげ、自分の誓願を果たすために上って行こうとしたが、」とあります。これまでと同じようにシロに上っていこうとするのです。ただ今回は誓願を果たそうとするのです。つまり彼はハ

ンナの誓いを後押ししているのです。ユダヤ人の法律では妻の立てた誓いに夫が反対した場合は、その誓いを無効にすることができたのです。民数記30章に出てきます。しかし、エルカナはハンナの誓いを無効にしなかったのです。息子を主に捧げるという愛するハンナの誓いに彼は同意しました。彼も自分のことなど考えていません。息子といろいろなことができるのに、そのすべてを彼は喜んで放棄するのです。誓願を果たすためにシロに上っていかうとした時にハンナはこういう願いを出します。22-23節「ハンナは夫に、『この子が乳離れし、私がこの子を連れて行き、この子が主の御顔を拝し、いつまでも、そこにとどまるようになるまでは。』と言って、上って行かなかった。夫のエルカナは彼女に言った。『あなたの良いと思うようにしなさい。この子が乳離れするまで待ちなさい。ただ、主のおことばのとおりになるように。』こうしてこの女は、とどまって、その子が乳離れするまで乳を飲ませた。」とあります。ハンナはこの子が乳離れするまでここに置いておきたいとリクエストします。イスラエルでは大体3歳までミルクを与えますので、3歳まで母親の懐にいたのです。このように言っても全然不思議ではなかったのです。そして彼女が言っていることはただそれだけではない。主にサムエルをお返しした時に、その当時の祭司エリの足手まといにならないようにと、そこでの働きができるようにと行って、からだもそして彼の信仰も成長するためにこの期間を願い出るのです。エルカナはその願いを認めて「主のおことばのとおりになるように」と言います。すばらしい信仰のご夫妻の話です。

そしてその日が遂にやって来るのです。24節「その子が乳離れしたとき、彼女は雄牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つを携え、その子を連れ上り、シロの主の宮に連れて行った。その子は幼かった。彼らは、雄牛一頭をほふり、その子をエリのところに連れて行った。」、これは子どもが生まれた時の儀式です。子どもが生まれる場合、あるきよめの期間を経て主の前に全焼のいけにえを捧げるためにやって来るのです。その定めがレビ記12章の中に出てきます。本当ならばそこでは1歳の子羊1頭と家鳩のひな山鳩を一羽と決められています。でも彼らはその教えに従っていないのです。彼らが連れてきたのは子羊ではなく雄牛でした。なぜかという、それは彼らの感謝を表しています。そしてそのいけにえを捧げた後、ハンナは祭司のところに行きます。26節「『おお、祭司さま。あなたは生きておられます。祭司さま。私はかつて、ここのあなたのそばに立って、主に祈った女でございます。この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は一生、主に渡されたものです。』こうして彼らはそこで主を礼拝した。」と。最後の28節の「彼らはそこで主を礼拝した」の「彼ら」は原語では三人称単数です。恐らく両親とサムエルです。3歳の子がこうして神を礼拝するのです。これはまさにハンナの働きです。彼女は神に仕えること、祈ることを実際に示すことによって、このように生きて行くのだということをお教えただけではなく、神についても当然サムエルに教えました。先ほども見てきたようにハンナは神を知っていました。神についてではなくて神自身を個人的に知っていました。

3) ハンナの信仰：ハンナの祈り 2：1-10

というのは2：1から出てくるハンナの祈りを見た時にハンナがどんな信仰を持っていたのかを明らかにしています。

(1) 神は全能なお方 1節

2：1「私の心は主を誇り、私の角は主によって高く上がります。」、「角」というのは力の話です。つまり神にはどんなことでもできるのだ。神は祝福を与えてくれるのだ。つまり神は全能なお方、どんなことでもできるお方だとたたえるのです。

(2) 神はきよいお方 2節

2節「主のように聖なる方はありません。」、すべてにおいて完璧にきよいお方だと。

(3) 神は不変のお方 2節

また「私たちの神のような岩はありません。」、「岩」は主の御力や安定、不変の話です。つまり彼女は私の神は不変の方、どんなことがあっても変わらない神、だから信頼に値する神である、約束を信じることのできる神であると。

(4) 神は全知のお方 3節

四つ目に2：3に「高ぶって、多くを語ってはなりません。横柄なことばを口から出してはなりません。まことに主は、すべてを知る神」であると。全知の神であると。どんなことでもご存じであると。

(5) 神は主権者なるお方 4-7節

そして4-7節を見ると、そこには主権者なる方、「勇士の弓が砕かれ、弱い者が力を帯び、食べ飽いた者がパンのために雇われ、飢えていた者が働きをやめ、不妊の女が七人の子を産み、多くの子を持つ女が、しおれてしまい主は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。主は、貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのです。」、この方がすべてのことを支配しておられる、主が主権者なのだから望まれることをなされるということなのです。

(6) 神は憐れみ深いお方 8節

6番目に出てくるのは8節です。「主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人を、あくたから引き上げ、高貴な者とともに、すわらせ、彼らに栄光の位を継がせます。」、つまり神というのは憐れみ深いお方だと。こういう弱いものに憐れみを示される方であると。

(7) 神はさばき主なるお方 9-10節

そして9-10節、裁き主なるお方だと。「主は聖徒たちの足を守られます。悪者どもは、やみの中に滅びうせます。」、「主は地の果て果てまでさばき、」と。

驚くべき信仰者でしょう？彼女はこうして神への賛美を口にするのです。彼女の祈りです。神をたたえています。私の神は全能であり、きよい方であり、不変の方であり、全知の方であり、主権者であり、あわれみ深い方であり、そしてさばき主なる方と、その告白をしたということは間違いなく彼女はこれが私たちの神なのだと言っている自分の愛する息子に3年間教えたはずで、それゆえに彼はまだ3歳であったのに、彼がシロに上った時、両親は息子をエリのもとに置いて帰っていくのです。主によって大いに用いられたサムエルの信仰の基礎はハンナとエルカナからであるということは間違いありません。サムエルはヘブル11章に記されている信仰の勇者たちのひとりとして挙げられています。パウロもペテロもこの預言者サムエルに言及しています。

すばらしい女性がいたのです。神は彼女を大いに用いられた。それは今見てきたように、彼女の信仰でした。ゆえに神は彼女をお用いになり、そして彼女からすばらしい信仰者サムエルが生まれてきます。私たちが親としてしっかり覚えなければいけないことは、もし子どもが与えているならば主が何をあなたに願って子どもを託したかです。私たちの責任はこの子どもたちにこの神を伝えることです。主が与えてくださったこの信仰が次の世代にちゃんと引き継がれていくように、その子どもたちを教導くことです。子どもたちをどの学校に入れたり、どの仕事につかせるか、どんな生活をさせるか、そんなことのために私たちに子どもが託されたのではない。この子どもたちは神のものです。私たちが親に与えられた責任はこの子どもたちに一番大切な神を伝えることです。もちろん私たちは地上にあって子どもたちと、孫たちと楽しむ時間を持てます。でも、この瞬間にすべての終わりが来たら彼らはどこに行きます？そのことを考えている人たちはありとあらゆる機会を用いて救いを伝えようとするでしょう。なぜなら我々の愛する者はこの瞬間に永遠の地獄に向かっている可能性があります。伝えなければいけないのです。でも私たちが託された子どもたちにこのすばらしい神を伝えるためにはまずあなたが神を畏れ、神を信頼し、神を愛する者として成長することです。そうでなければどうやってそれを教えます？我々はこの大切なことを機会をつくって教えるのです。もちろん言葉をもって。そしてもっと大切なのは私たちの生き方をもってです。なぜなら子どもはあなたを見ています。あなたの口から出ることばを聞いているのです。あなたの信仰がどんなものなのか、あなたの神が本当に愛するに値するかどうか。どうかこの機会にハンナの信仰をもう一度覚えて、このすばらしいひとりの女性をあなたの愛する模範として、彼女にならって歩んでください。そのことを期待します。

そして主が我々の愛する者たちにどんなみわざをなしてくれるのか、そのことを期待しながら、私たちは歩いていくことができます。どうか信仰者の皆さん、主がすばらしいことを、救われることがすばらしいことを、主とともに歩むことがすばらしいことを、永遠が約束されることがどんなにすばらしいことかを我々は証をしていくのです。きょうからその歩みを始めてくださることを心から願います。